

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370046

研究課題名(和文) 東アジア近世儒学思想における評価基準としての「二程子」像の総合的研究

研究課題名(英文) Research of the Cheng brothers as a valuation basis in Confucianism thought of early modern East Asia

研究代表者

市来 津由彦 (ICHIKI, TSUYUHIKO)

広島大学・文学研究科・教授

研究者番号：30142897

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、北宋の程顥・程頤兄弟が後世に投げかけた諸問題について、東アジアの思想連動を捉える視座から総合的に考察しようとするものである。以下の4点について検討した。1. 程氏兄弟の事実性の究明。/ 2. 『四書集注』の「程子」の検討、『朱子語類』「程子之書」の解読。/ 3. 南宋末～元・明、及び朝鮮朝における「二程子」の語られ方の検討。/ 4. 日本の江戸時代における「二程子」像の検討。

ただし当初の計画が不十分で、遺憾ながら、形ある成果の発表には至っていない。

研究成果の概要(英文)：I tried to examine synthetically the problems which the Cheng程 brothers (程顥・程頤, 二程) of Northern Song threw at future generations by this research from the viewpoint which catches thought linkage of East Asia. I examined the following four points. 1. Investigation of Cheng brothers' facticity. / 2. Examination of "程子" of "collection Note of the four Chinese classics四書集注", the decipherment of "Chu-tzu Yulei朱子語類"程子之書. / 3. Investigation of how to say that "Cheng brothers" from end of Southern Song南宋 to Min明Era and in Chaoxian朝鮮. / 4. Investigation of "Cheng brothers" image as thought valuation basis in the Edo period of Japan. However, though regrettable since the original proposal was insufficient, I have not resulted in the announcement of the result of having clarified.

研究分野：中国哲学

キーワード：二程子 道学 朱子学 明代朱子学 陽明学 朝鮮朝儒学 江戸儒学

1. 研究開始当初の背景

連動する東アジア各社会近世思想の展開を支える基礎に朱子学がある。この学を「東アジア」という視点からみるのが、筆者も関与しつつ、近年唱えられてきた。そのときに、中国内の思想史文脈と社会史的研究の結合という視点とは別の、中国を越えて各社会に拡汎していく思想の普遍面にアプローチすることが必要である。朱子学の強さの源泉は、その社会的機能と議論内容の両面から考えられる。筆者はこれまで主として前者の研究を遂行してきた（『朱熹門人集団形成の研究』創文社、2002年、2009-12年度科研費研究「朱子学」の誕生—南宋後期における士大夫思想展開の発展的研究」など）。

本研究は後者に関わるものである。近世儒学思想の「議論の場」が士人層に共有され安定的に持続したのだが、近世東アジアに広がる「理・気・心・性」といった共有概念の議論を思想的議論に上し、後世の思考枠組を作ったのが、北宋道学の、特に程顥、程頤の程氏兄弟である。本研究はこの程氏兄弟が後世に対して投げかけた問題性を、東アジアの思想連動を捉える視座からあらためて検討しようとするものである。

2. 研究の目的

北宋道学、特に程氏兄弟の思想の問題性は、大きくみれば三段階の展開をたどる。

- ①北宋における二程思想の事実性の問題
- ②朱熹の思想における二程評価の問題
- ③元明以降の「二程子」評価の問題

まず①の二程の事実性について年譜的研究により従来の水準を更新し、その成果から「評価」という理念的方向に離陸する②の事象を客観化し、そのことにより元明において「二程子」を捉える評価の基準を立てる。そしてその視座を朝鮮朝、および江戸儒学の二程論に適用して、一貫した視点から東アジア儒学思想史を構築することを試みるというのが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は以下の4点を明らかにしようとした。

- (1)程氏兄弟の事実性の究明。これは、2以下の研究の基礎材料となる。
- (2)『四書集注』の「程子」の検討。『朱子語類』「程子之書」の解読を中心として、朱熹における思想評価基準としての「程子」像の形成を考究する。
- (3)南宋末～元、明、及び朝鮮朝における思想評価基準としての「二程子」の語り方の検討。
- (4)日本の江戸時代における思想評価基準としての「二程子」像の検討。

4. 研究成果

平成24年度の研究申請書類作成時点で多忙になることが懸念された、24、25年度のこととして依頼された部局副研究科長、大学評議員その他の管理行政役が、予想に反して27年度まで続き、遺憾ながら上記(1)～(4)のいずれについても当初の計画通りには形ある成果に至ってはならず、未完成のままである。以下、進捗状態をありのまま述べる。

(1) 程氏兄弟の事実性の究明。

清・池生春『明道先生年譜』『伊川先生年譜』と中華民国・姚名達『程伊川年譜』等をつきあわせ、史資料も参照しつつ、二程の新「年譜」作成をめざしていた(25-28年度)が、なお未完成である。

関連して、かつて「集刊東洋学」に37回にわたって共同掲載した東北大学朱子語類研究会の『朱子語類』本朝人物篇訳注の電子テキスト化を図った(26年度)。この部分は南宋・朱熹の程子像を検討する背景的基礎になるものだが、朱熹の北宋像をうかがう素材ともなり、二程新「年譜」作成に資するものである。未完成である。将来的には汲古書院から訳注を刊行する予定である。

(2) 『四書集注』の「程子」の検討、『朱子

語類』「程子之書」の解説。

朱熹において二程思想が程顥と程頤に分離する。また分離した特に程頤の思想像も、北宋の程頤とは異なるものとなり、その二程像が元・明の二程像の基礎となっていく。その詳細を受け止めるには『朱子語類』「程子之書」の解説が重要であり、大学院の演習授業の一部として、三巻ある内の「下」を継続的に解説してきた(25-28年度)。今後、平成29ないし30年度から、広島大学朱子語類研究会の研究として『東洋古典学研究』誌に、三巻中の「上」から訳注を掲載していく予定である。

- (3) 南宋末～元、明、及び朝鮮朝における思想評価基準としての「二程子」像の語られ方の検討。

事例調査として、王守仁『伝習録』における二程の語られ方を検討した。二程を相違において捉えるのは朱熹と同様だが、朱熹とは逆に程顥像が前面に出てくる。その意味を考察するうえで、『宋元学案』等に調査対象を広げる必要があるが、未着手である。

また、明代の朱子学派人士の研究として、『朱子語類』と同様に、問題ごとに程子の言葉を分類編集したものが明代に作成されている。東アジア儒学の連動を体現するものとして興味深いのは、中国で編集され朝鮮・釜山で刊行されたものが日本国内に入り、その複数がなお著名漢籍所蔵所に保存されている例である(『程氏遺書分類』『程氏外書分類』。広島県立図書館浅野文庫所蔵当該書解題を執筆担当した。26年度刊行)。

- (4) 日本の江戸時代における思想評価基準としての「二程子」像の検討。

上記(3)の二程の言葉の再編書が江戸日本でも作成されている。事例調査として古賀侗庵(精里の三男)『崇程』をとりあげ解説している。この書は上記『程氏

遺書分類』とは異なり、朱熹『四書集注』で問題となる箇所を選択的に見出しとして掲げ、朱説、程説、その他、必要な場合は北宋以降の道学説をその下に並べ、主として朱説が不備で程説が優るところを侗庵が論評評価するというしくみの書である。侗庵段階になると清朝の諸解釈も日本に入っており、江戸儒学の学術水準の高さをはかることができる。解説には時間がかかり、なお継続中である。

その他、訳注「朱熹『朱文公文集』跋文訳注稿」は、朱熹の思想のみならず、その芸術観念や士大夫の日常的交遊の様態などが朱熹跋文資料にうかがえ、南宋士大夫の思想・心性と文化意識を探るのに有用な一級資料であることから、その訳出と各条の研究的意義について検討し続けているものである。北宋道学や南宋初に対する朱熹の見解がうかがえる条がかなりあり、その検討内容は本課題研究に資するものである。

論文「儒学言説在明治時期的変化」は、江戸時代までは東アジア共有思想として朱子学が通行していたのが、江戸から明治への社会変化の中で、日本にとっては日本一国儒学に転換する事態を、明治初から中期の日本語環境の変化の中で考察したものである。本課題研究の内部ではなく、外枠の全体の意義をあらためて捉えるのに資するものである。

論文「地域講学から王朝の学びへー「学」としての朱子学の形成をめぐる一」は、「朱子学」が持つ士大夫文化の心性(メンタリティー)について上記、朱熹の跋文資料にみられる心性から考察したものである。上記(2)研究に関連して、朱熹の北宋、南宋初の像をみるのに資するものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 市來津由彦、儒学言説在明治時期的变化
(中国語：韋佳訳)、世界哲学(中国社会科学院哲学研究所)、2015-3、査読有、2015、
pp.120-128.

② 市來津由彦、地域講学から王朝の学びへ
ー「学」としての朱子学の形成をめぐって一、伊原弘・市來津由彦・須江隆編『中国宋代の地域像一比較史からみた専制国家と地域一』岩田書院、査読無、2013、
pp. 179-208.

[訳注その他] (計 8 件)

① 市來津由彦、朱熹『朱文公文集』跋文訳
注稿(十九)、東洋古典学研究、査読無、
第 42 集、2016、pp. 99-116.

② 市來津由彦、朱熹『朱文公文集』跋文訳
注稿(十八)、東洋古典学研究、査読無、
第 41 集、2016、pp. 161-180.

③ 市來津由彦、朱熹『朱文公文集』跋文訳
注稿(十七)、東洋古典学研究、査読無、
第 40 集、2015、pp. 131-146.

④ 市來津由彦、朱熹『朱文公文集』跋文訳
注稿(十六)、東洋古典学研究、査読無、
第 39 集、2015、pp. 151-166.

⑤ 市來津由彦、朱熹『朱文公文集』跋文
訳注稿(十五)、東洋古典学研究、査読無、
第 38 集、2014、pp. 129-149.

⑥ 市來津由彦、朱熹『朱文公文集』跋文
訳注稿(十四)、東洋古典学研究、査読無、
第 37 集、2014、pp. 111-130.

⑦ 市來津由彦、朱熹『朱文公文集』跋文訳
注稿(十三)、東洋古典学研究、査読無、
第 36 集、2013、pp. 197-208.

⑧ 市來津由彦、朱熹『朱文公文集』跋文
訳注稿(十二)、東洋古典学研究、査読無、
第 35 集、2013、pp. 179-193.

[学会発表] (計 2 件)

① 市來津由彦、日本の明治前半期における漢文
訓読文化と儒学言説の位置、紀念北京日本
学研究中心成立 30 周年特別講演会、中
国・北京・北京日本学研究中心、2015 年

9 月 25 日。(日本語。招待講演)

② 市來津由彦、「朱子学」の形成に関する問題
群の考察ー朱熹思想二次受容者の位置と機能
一、第 41 回宋代史研究会、福岡・志賀島
国民休暇村、2015 年 8 月 28 日.

[図書] (計 1 件)

① 伊原弘・市來津由彦・須江隆編『中国宋
代の地域像一比較史からみた専制国家と
地域一』岩田書院、2013、総 408 頁。(共
編著。pp. 179-208)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

市來 津由彦 (ICHIKI TSUYUHIKO)

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 3 0 1 4 2 8 9 7

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号:

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号:

(4) 研究協力者

なし ()